

■阪神・淡路大震災で福祉の原点にふれる

1995(平成7)年1月17日の大地震では、築50年の「せきもり分場」が全壊。その他の各施設は大きな被害を受けず、利用者・家族と職員にも家屋の全半壊はあったものの、亡くなった人はありませんでした。

震災後の混乱に対して「神戸聖生園」「神戸友生園」「神戸光生園」は、1週間後の1月23日から在宅障害者のショートステイの受け入れを開始。生活機能の低い通所施設でしたが職員も一緒に寝泊まりして過ごす非日常生活が4月末まで続きました。利用者も職員も身を寄せ合って過ごした日々は、福祉の原点に立ち戻ったと思えた貴重な経験でした。



震災で全壊被害を受けた「せきもり分場」



神戸聖生園職員による炊き出し

震災後すぐに和田山地区から支援の手が到着。翌日早朝には救援物資が、翌々日には神戸愛生園にトイレ用水12トンが運び込まれました。この水は入所施設である神戸愛生園だけでなく、隣接する北須磨団地の人々の生活にも役立ちました。

■台風で土石流が真生園を襲うも死者・けが人なし

2004(平成16)年の10月20日の午後には、台風23号が和田山地区を襲いました。台風の大雨で真生園の背後の金梨山斜面が崩落。土石流となって真生園を直撃し、利用者の居室に膨大な量の土砂が侵入しました。利用者は、谷川の水の量・色・音から危険を察知した職員の手で直前に安全区域にあるさくらの苑に避難。一人の死者や負傷者も出さずにすみました。

当日夜は、真生園の全職員で、朝来消防本部の手で竹田会館に搬送された利用者やさくらの苑と平生園に退避した利用者を見守り、翌日からは真生園の被害が及ばなかった居室と平生園会議室で懸命に避難生活を支えました。

施設には、翌日の和田山町消防団100名を皮切りに、連日多くのボランティアが駆け付け、神戸地区からも計150名が日帰りで長靴・スコップ、手弁当で応援に加わり、人手と建設機械による懸命な復旧活動が展開されて、10日間で山のような量の土砂を取り除きました。神様の大きな力に守られた利用者は、年内に通常の生活に戻ることができました。



台風被害を受けた一夜明けて(10月21日)



復旧作業をする消防団員(10月21日)

■社会福祉基礎構造改革の荒波に向かう

わが国は1995(平成7)年に高齢社会に突入。国はさらなる高齢化に向けて2000(平成12)年4月から介護保険制度を導入しました。この制度による最大の変化は民間営利企業が介護・福祉分野へ参入したこと。「市場化」の流れが福祉の世界を大きく変えていきます。

「措置から契約」への転換により、社会福祉法人は急激に経営感覚を求められ始めました。しかし近年、経営中心の考え方が行き過ぎたのではないかと、社会福祉法人の存在価値を巡って様々な議論が始まりました。介護報酬の切り下げ、社会福祉法人課税問題などかつてない荒波にもまれ、今の社会福祉法人は漂う小舟のようなものです。

与えられる福祉から、切り拓き創造する福祉の時代に。これまでの神戸聖隷は行政の期待に応える形で成長してきましたが、もうそこから脱却して自らの勇気と決断で未来を切り開かねばならなくなりました。



金附理事長(当時) 兵庫県社会賞受賞

■創始メンバーが去る中で基本理念を中心において歩む

福祉制度の転換期に、2000年までの法人の順調な発展を支えた創始期と成長期のクリスチャンメンバーが次々と定年を迎えました。荒海に海図を失う状況に似ています。ただ、先輩たちは「基本理念」と「行動規範」を残してくれました。

それは、私たちがキリスト教精神に基づき聖書が示す愛と奉仕の実践を通して社会福祉を向上させることを目的とした集団であるとし、そのために私たちは利用者に仕え、一人ひとりのいのちをもっとも大切なものとして守り、利用者が生涯をいきいきと生きることができるよう支援して、人類全体の幸せを追求するように行動しなければならないというものです。

基礎構造改革の全体像が見え始めた2006年ごろからの10年間は、折に触れて基本理念を唱和することで、神戸聖隷を創設された神様の意図を知り、聖書に示された人間観を中心において毎日の福祉の仕事に向かう心を整えるように、ひたすら努力しました。



中興を担った役員、右から越智靖、小森宏、金附洋一郎、土肥隆一、畑中康雄

私たちはこれからも神戸聖隷の価値を強めて、
だれもが幸せな共生社会を目指します。

■すべての人が支え合い、安心して働き暮らせるコミュニティの実現を

障害を持つ人や独居高齢者が地域社会の中で生きていける地域共生社会を実現するために地域包括ケアシステムの構築が始まっています。

しかし福祉拠点である施設では、そこで働く人材が集まらず困っています。地域の福祉力を強めるために施設を建設しても、人材が不足するために有効な福祉事業が展開できなくなっているのです。いま全国の社会福祉法人はどこもこの大きな問題に苦しんでいます。

福祉の人材が集まらないことは、本当は住民みんなの問題なのですが、多くの人は家族に介護が必要になるまで気づきません。その意味で、私たちは、創始のメンバーとは大きく違う時代のフロンティアに挑みます。地域をだれもが住みよい場にするために、地域包括ケアの中核になろうと思います。

■地域で一番のいのち輝く夢のカンパニーを目指す

必要であるのに評価が低い福祉の仕事の現実をいかに克服するか。個々の社会福祉法人はチャレンジしなければなりません。

私たちは2025(平成37)年に創業50年を迎えます。その時の神戸聖隷福祉事業団の姿を「輝こう2020そして2025へ」の掛け声の下、「全ての人が支え合い、安心して働き暮らせるコミュニティの実現」と「地域で一番高い評価を受けられるいのち輝く夢のカンパニーの実現」を目指すことにしました。

一人ひとり小さな存在ですが、基本理念をみんなが体現するよう行動し、利用者も職員も一人ひとりが輝いて働き暮らせるようなカンパニーを実現できるように努めてまいります。

